フランスコレーズ県オック語方言地域の２口話における ラテン語　ＣＡ－，ＧＡ－ の硬口蓋音について

Palatalisacion dels CA-, GA- latins dins dos parlars occitans de la Corrèze en França

前川　眞明子
Mamiko MAEKAWA

０．はじめに

現代オック語において、北部オック語に属するリムーザン方言圏であるフランスコレーズ県の２地域での方言調査によって得られたケースをアトラス言語地図との比較分析をすることにより、その地域の言語的位置を明確にしようとすることが私の研究課題である。

北部オック語方言（limousin, auvergnat, vivaro-alpin）と南部中央の標準オック語と称せられる languedocien 方言、F. Mistral (1830-1914) の rhodanien 下位方言を含む provençal 方言、そして西部にはバスク語との関連が考えられる gascon 方言の６つに大別される現代オック語において、ラテン語の軟口蓋閉鎖音 / k / と / g / が前舌母音 / a / の前で口蓋化されるという現象が北部オック語方言と他の方言を隔てる最たるものの一つに挙げられる。[1)]

本稿の目的は、私の研究対象地域の２口話における現地調査結果をもとにして、上記の硬口蓋音の音声的特徴について一考察を示すことにある。

本文中の分析語に付随するページ番号等は、Marie-Thérèse Giscard (1908-) の *Curemonte* (1990) にでてくる Curemonte 村に伝わるオック語方言の聖歌（p. 27, pp. 204-205, p. 229）、歌（p. 96, pp. 129-130, pp. 165-167, p. 193, pp. 218-219）、諺（p. 251-261）の番号であり、その表記は、彼女の個人的なフランス語の正書法にあてはめたフランス語式発音綴り字法である。さらに、lim. とは、Gonfroy （1976, A 綴字法）から引用、h.-quer. とは、Lescal (1923) から引用したフランス語正書法にあてはめたフランス語式発音綴字法である。lang. とは、Alibert (1988, A 綴字法）から引用したものである。発音については、現地調査によるものである。

Curemonte 村は、当時２０３名のうち５２名が村の中心部に住む人々であり、１００年前の１８９３年には、９０５名、１９４５年、４２５名、１９６２年、３５２名（中心部　１４４

名）、１９７６年、２４８名（９３名）と過疎化が進んでいる。[2)]

le Bos 集落は、１５名であり、１００年前には、１５８名であった。[3)]

そして、共にフランス語化された時期は、約７０年前から８０年前とみられる。根拠としては、「１９１４年以前にはフランス語が話せてから小学校に入学する児童は、ほとんどいなかったし、親も当然オック語しか知らなかった。１９２０年代に入りようやく親の世代にも徐々にフランス語を話せるものがでてきた」[4)]という *Curemonte* での記述と le Bos では、当時８３歳の婦人は、５歳まで全くフランス語は知らなかったと答えている。

現在も７０歳以上の高齢者で農業従事者同士の会話は、完全なる２言語者（フランス語、オック語）ではあるが、母語としてのオック語であった。

調査協力者は以下の人々である。

Curemonte(1993)

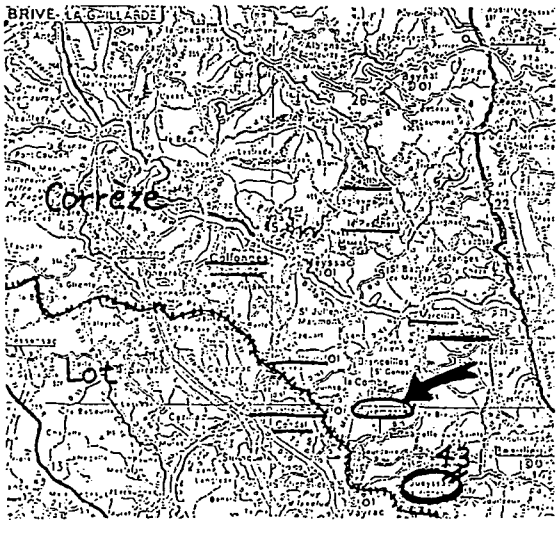
性別　年齢　出生地

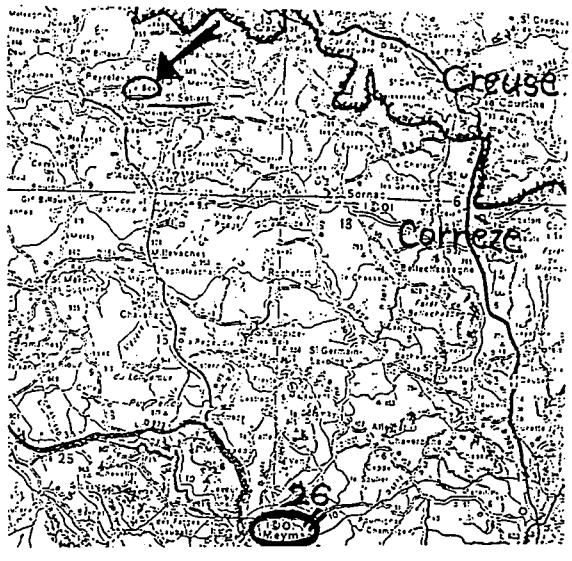
1.F., 37, Curemonte	7.F., 62, Curemonte	13.M., 73, Condat
2.F., 40, Curemonte	8.M., 67, Curemonte	14.M., 76, Curemonte
3.M., 42, Collonges	9.F., 67, Marcillac	15.F., 80, Curemonte
4.F., 42, Curemonte	10.M., 69, Curemonte	16.M., 86, Chauffeur
5.F., 50, Puy d'Arnac	11.M., 73, Curemonte	17.F., 86, les Quatre-Routes
6.M., 56, Le Pescher	12.M., 73, Sérillhac	

le Bos(1997)

1.F., 83, le Bos　　2.F., 52, Paris　（発音表記者）

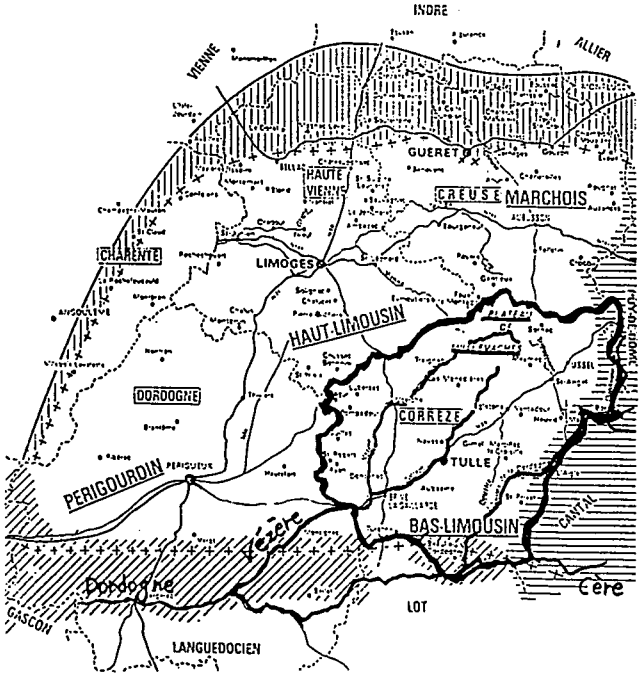
Ｃｕｒｅｍｏｎｔｅ　　ｌｅ　Ｂｏｓ　　１ｃｍ＝２ｋｍ





2．コレーズ県の言語的位置

対象地域であるコレーズ県の言語的位置は、リムーザン方言圏に属し、その下位方言の４方言（haut-limousin, marchois, périgourdin, bas-limousin）[5] の一つである bas-limousin 方言圏で、最北部はマルシュ方言圏に接し、最南部は北部オック語圏と南部オック語圏 を分ける言語境界線上にあたり、詳細に述べると bas-limousin 方言とロット県の languedocien 方言の下位方言である高地ケルシー地方のケルシー方言の一つ dordonhec 方言に接している。つまり、私の研究対象地域の一方は、最北部でクルーズ県に接する Saint-Setiers 村 le Bos という集落であり、他方は、最南部でロット県に接する Curemonte 村であり、それぞれ低地リムーザン地方のコレーズ県の最北部と最南部として方言境界線上にあたるの音声的特徴をラテン語 CA-, GA- の硬口蓋音においても示していると仮定される。



haut-limousin

stricto sensu; (Haut-Vienne, à l'éxception du nord du département)

lato sensu; (haut-limousin+marchois+périgourdin)

bas-limousin

(majeure partie de la Corrèze, sauf le nord-est)

marchois

(extrême nord dela Haute-Vienne et Creuse, sauf l'est)

périgourdin

(Dordogne au nord de la rivière du même nom et de la Vézère)

!!!!!!!! croissent ———— limite nord de l'occitan

//////// interférences gascon, limousin, auvergnat

++++++++ limite dialectales ═══ interférences limoousin, auvergnat

----------limite de départements

Decomps, (D.), *L'occitan...*, p. 14 転写.

-3．ラテン語 CA－

ラテン語の軟口蓋閉鎖音 / k / は、フランス語のみならず北部オック語においても前舌母音 / α / の前では硬口蓋音に変化した。[6]

3．1　硬口蓋音のあらわれ

現代リムーザン方言圏の２調査地点のケースをみてみたい。

Curemonte	Le Bos	lim.	h.-quer.	lang.	fr. et LATIN
ché (p. 251, pro. 1)	ssi	chen	co	can~chin	chien CANIS
[tse]	[si]				
chabro (p. 251, pro. 3.)	ssabro	chabra	crabo [7]	cabra	chèvre CAPRA
[tsabro]	[sabro~tsabro]				
choval (p. 254, pro. 41)	ssovo [8]	chavau [9]		caval	cheval CABALLUS
[tsoval]	[sovo]				

この様に、CA > cha の硬口蓋音は、Curemonte 村においては [tsa] 、 le Bos 集落では、[sa] としてあらわれる。 ただし下記の様に、Curemonte 村では、南部オック語との接触により硬口蓋音化していないケースもみられ、同じ語においても混乱が生じている。これは、１２、１７のロット県を出生地とする調査ケースでは、硬口蓋音化していないことからも個人的理由とさらに言語境界線上地域によく見られる混乱であろう。

chanta (p. 252, pro. 8)	ssanta	chantar	conta [10]	cantar	chanter CANTARE
[tsanta]	[santa]				
canta (p. 205, I, l. 3)	ssanta	chantar	conta	cantar	chanter CANTARE
[kanta]					

表記上の揺れは、Giscard 夫人のものであるが、一般に Curemonte 村においての硬口蓋音は、下記の様に tz [ts] がよく表わしている。

tzomi (p. 204, I, l. 3)	ssomi	chamin	comi	camin [11]	chemin CAMMINUS
[tsomi]	[somi]				

また、le Bos 集落での表記は、１のケースの娘（２）が書き取ったものであるが、フランス語の [s] （歯茎摩擦音）ではなくむしろカタラン、スペイン語の舌先歯音に近く、[12]呼気をともなって聞こえた。 Curemonte のケースと比較すると歯音的要素が失われている。

さらに、 Curemonte 村で揺れの多かった 「城」という単語については、次のようである。

chastel [tsastel~tsostel~sostel~kastel~kohtel] [13]					
	ssatei	chasteu		castèl	château CASTELLU
	[satej] [14]				

3．2　アトラス言語地図での分析

分析語　　CA＞cha

13. chaleur<CALOR ; oc. calor

193. chemin<CAMMINUS ; oc. camin

474. chenille<CANICULA ; oc. canilha

645. chanteur, chanteuse<CANTORE ; oc. cantador

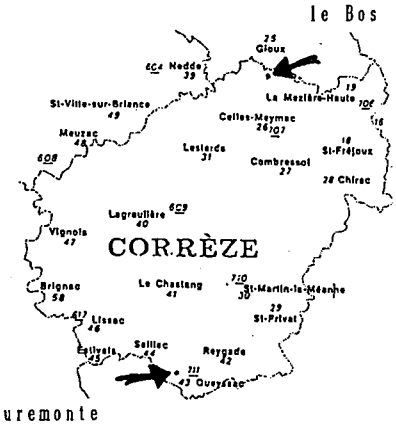
646. chanter, chanson<CANTARE ; oc. cantar

848. chaine<CATENA ; oc. cadena

851. chapeau<CAPPELLUS ; oc. capèl

863. chemise<CAMISIA ; oc. camisa

コレーズ県の言語調査地点



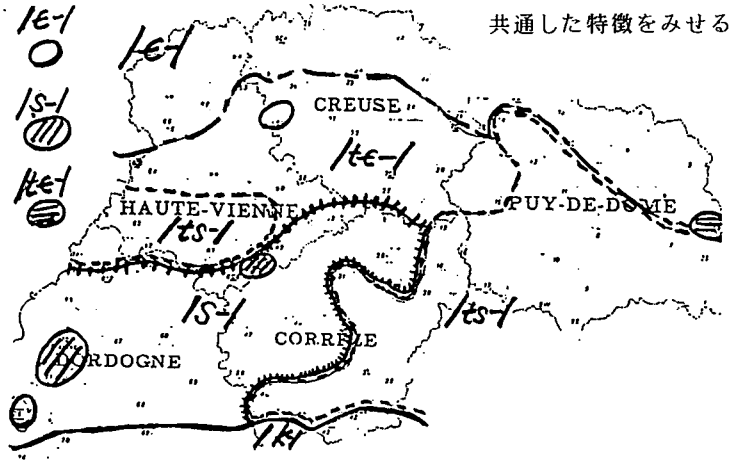
分析語により北部オック語の CA ＞ cha の硬口蓋音化による明確な言語境界がみてとれる。北から、

（１）フランス語圏との接触地域、クロワッサン圏では硬口蓋音のあらわれは、フランス語と同様［ C = ʃ ］である。 例外 ： 地点番号１９、分析語１３、８４８［ tC ］

（２）次は、［ tC ］の地域である。コレーズ県を２つに大別するのが、東部の［ ts ］、地点番号（１８、１９、２８、２９、３０、３１、４４、４５） 例外 ： 地点番号３１、分析語４７４［ts］、６４５［Ø］、６４６［ｔｓ］　そして、西部の［ ｓ ］、地点番号（２６、２７、４０、４１、４６、４７、５８）である。 例外 ： 地点番号２６、分析語４７４、８６３［ss］、６４５、８４８、８５１［Ø］ ； ２７、分析語１３［ts］ ； ４６、分析語１３［ｔｓ］

（３）最南部、ドルドーニュ川流域地帯、地点番号４２、４３は、［ｋ］と軟口蓋閉鎖音を保っている。

共通した特徴をみせる分布図の境界線



4．ラテン語ＧＡ－

ラテン語軟口蓋閉鎖音 / g / も / k / と同様に前舌母音 / a /の前では、硬口蓋音化をフランス語の場合と同じく北部オック語において生じた。[15]

4．1　硬口蓋音のあらわれ

現代リムーザン方言圏の２口話の硬口蓋音のあらわれは下記のようである。

Curemonte	Le Bos	lim.	h.-quer.	lang.	fr. et LATIN
jal (p. 252, pro. 8)	zao	jau	gal	gal	coq GALLUS
[dzal~zal~dʒal]	[zau]				

また、フランス語の摩擦音 [ʒ] に対する / j / の音声上のあらわれ方は、/ g / の硬口蓋音と共通している。

dzour (p. 27, Ⅳ, 1. 2)	zour	jorn	tsour~-un	jorn	jour DIURNUS
zour (p. 261, pro. 119)	zour	jorn	tsour~-un	jorn	jour DIURNUS
[dzur~zur~dʒur]	[zur]				
dzomaī (p. 27, Ⅱ, 1. 1)	zamaī	jamai		jamai	jamais JAM+MAGIS
jomaī (p. 258, pro. 87)	zamaī	jamai		jamai	jamais JAM+MAGIS
vierzo (p. 27, Ⅱ, 1, 1)	vierzo	vierja		verge	vierge VIRGO
vierdzo (p. 204, I, 1. 1)	vierzo	vierja		verge	vierge VIRGO

この様に、表記上の揺れが / j / の音声上の揺れをもよく表わしている。ここでは、/ g / > / j / の硬口蓋音のあらわれかたを確認することができる。[16]

le Bos では、歯音的要素が / ch / のケースと同様に失われている。

さらに、次の単語について Curemonte では、南部方言との接触による揺れがみられた。

jorric	cene	jarric	gorrit	garric	chêne GARRICA [17]
[dzori~zori~gori]	[senɔ]				

また、 le Bos 集落においては、フランス語の干渉による混乱がみられた。

4．2　アトラス言語地図による分析

分析語　　ＧＡ＞ｊａ

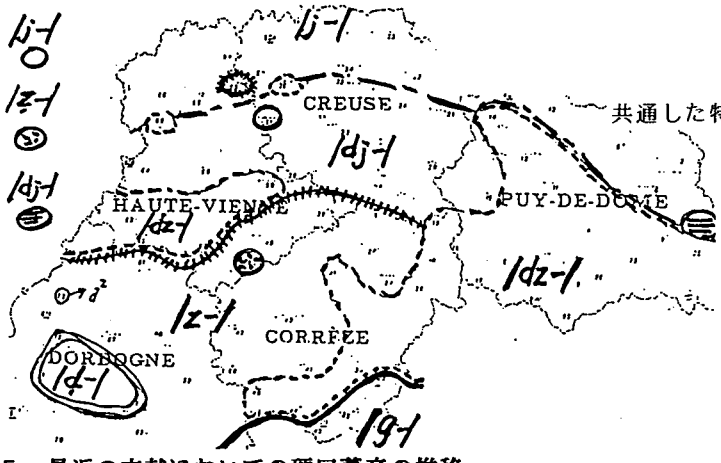
424. geai<GAIUS ; oc. gai~gag

ＣＡと同様に北から、

（１）クロワッサン地域　［ｊ＝ʒ］

（２）［ｄʒ］、そして、東部では、［ｄｚ］、地点番号（１８、１９、２８、３０、３１、４４、４５、４６）、西部では、［ｚ］、地点番号（２６、２７、４０、４１、４７、５８）。

（３）最南部、［ｇ］軟口蓋閉鎖音を保っている。地点番号（２９、４２、４３）。



共通した特徴をみせる分布図の境界線

5．最近の文献においての硬口蓋音の推移

CA>cha h.lim.[tcha];b.lim.[tsa] {Tintou(1973) による記述は左記のようである.}
GA>ja h.lim.[dja] ;b.lim.[dz~za]

CA>cha lim.standard [tcha] {Gonfroy(1975)では、最近の désocclusation により
GA>ja [dja] (ts/dz) (ch/j) といった音声上のあらわれがあるとする.}

Ca>cha [sa] {Decomps(1979) では、さらに / s ,c doux / 音が [ʃ] としてあらわれ、
GA>ja [za] また母音間の / z ,s / は、[ʒ] としてあらわれることを明記する.}

CA>cha [tc~tsa] {Ravier(1991)では、２次的発達として [c~sa] / [za] のあらわれを明
GA>ja [dj~dza] 記する.}

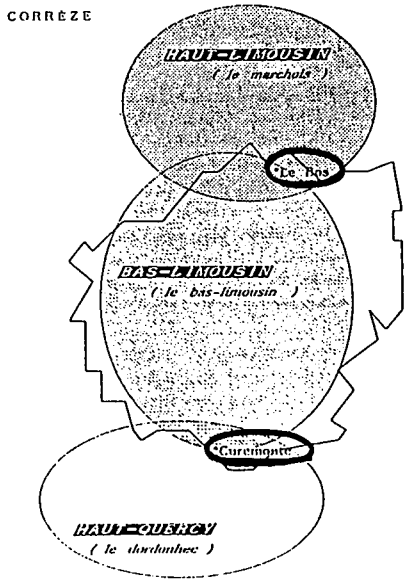
CA>cha [ts~s~tʃ~ʃa] {Lavalade(1997) では、左記のようにあらわれ方の揺れを示す.}
GA>ja [dz~z~dʒ~ʒa]

Chabaneau(1876)では、h.lim. tch/dj ; b.lim. ts/dz と記されている。[18]
Ringenson(1930)では、Dauzat の言語地図から、コレーズ県を / ts / のエリアではあるが、７１０地点で / 's / と歯音的要素を失う傾向を指摘している。[19]

6．おわりに

北部オック語圏の硬口蓋音は、フランス語での最後の発達段階（１３世紀以降）にあたる摩擦音に達する前の段階、一般には破擦音に留まっている。コレーズ県の２口話におけるこの硬口蓋音は、Curemonte 村においては、ケルシー方言との接触で硬口蓋化されないケースがみられるものの bas-limousin 方言としての硬口蓋音を保ち、le Bos 集落においては、marchois 方言圏の特徴を多く持つが、硬口蓋音に関しては、bas-limousin 方言の発達段階の２次的発達段階と見られる [ts] > [s], [dz] > [z] の最終段階に進んだものと考えられる。

今後の研究課題は、北部、南部オック語の言語境界線上の地点での２方言接触による揺れとフランス語との接触における混乱から生じる揺れについて更に詳細に調査を進めることにある。



marchois (haut-limousin)

CA> kya > tya > tcha [tʃa]

GA> gya > dya > dja [dʒa]

le Bos

CA> kya > tya > tsa > sa

GA> gya > dya > dza > za

Curemonte

CA> kya > tya > tsa :([ka])

GA> gya > dya > dza~ (>za) :([ɡa])

dordonhec (quercinois)

CA> [ka]

GA> [ɡa]

（本稿は、パリ第７大学大学院での D. E. A. (1996-97) 論文の１部を基に加筆したものである。）

註記

1) Bec(1995, pp. 34-35) ; Giscard(1990, p. 294) ; Lavalade(1991, p. 31) ; Ravier(1991, p. 93) ; Ringenson(1930, pp. 65-78) ; Ronjat(1932, pp. 40-44) ; Stenta(1990, p. 93) ; Tintou(1973, p. 19).

2) Lalé(1987, pp. 26-27, p. 115-119). また、村長の Tronche 氏が答えてくださった。

3) St-Setiers 村の役場からの回答によると：0~10(1), 11~20(1), 21~30(1), 31~40(2), 41~60(0), 61~70(7), 71~80(2), 81~(1).

4) Giscard(1990, p. 250).

5) Krispin(1991, pp. 4-5, pp. 8-9).

6) Bec(1995, pp. 34-35, p. 38) ; Camproux(1979, p. 100) ; Ringenson(1930, p. 68).

7) Alibert(1988, p. 23). 音位転倒による。

8) Alibert(1988, p. 18) ; Bec(1995, p. 38, pp. 41-43, pp. 54-56) ; Gonfroy(1976, p. 14) ; Stenta(1990, pp. 224-225) ; Ronjat(1932, pp. 205-206) ; Tintou(1973, p. 19).

9) 側音の -l（語末にあり元はラテン語の -L, -LL から派生したもの）が母音化する特徴をもつ haut-limousin 方言（lato sensu）を基にしている。Roux(1993, p. 2).

10) 語末の -r は、オック語でも動詞の不定法では発音されないが、vivaro-alpin 方言では保持されている。 Alibert(1988, p. 19) ; Bec(1995, p. 41) ; Decomps(1979, p. 19) Tintou(1973, p. 14). また、ケルシー方言において / a / は、強勢のある場合（m, n の前を除く）以外は [o] と発音される。（A 表記においては例外を示すために à [a] と記号をつける。）Alibert(19

88, p. 13);Krispin(1991, p. 11);Ravier(1991, p. 93). その影響として Curemonte においても混乱が見られる。 conta(p. 27, Ⅳ, l. 2) ssanta chantar conta cantar chanter CANTARE

11) ラテン語の母音間の -N- で後に語末となった古ロマンス語段階ですでに不安定であった / -n / は、languedocien 方言と同様 limousin 方言においても発音されない。しかし、provençal, gascon 方言では軽い母音の鼻音化をともない子音の共鳴を引き起こす。Bec(1995, pp. ^-43, p. 56);Ravier(1991, p. 84, p. 87, pp. 99-93).

12) Bec(1995, p. 31).

13) Alibert(1988, p. 17);Bec(1995, p. 41);Krispin(1991, p. 6);Lescal(1923, p. 26).
Haut-Quercy 地方のケルシー方言の特徴であり、語中の特に / p, t, k / の前の / s / は [h] 帯気音 (une aspiration)となり発音されることの影響とみられる。また、ペリゴール地方の Sarladais 方言でも、子音の前の / s / は、呼気 (articulation "expirée") [kohtɛl] とある。Roux(1993, p. 2).

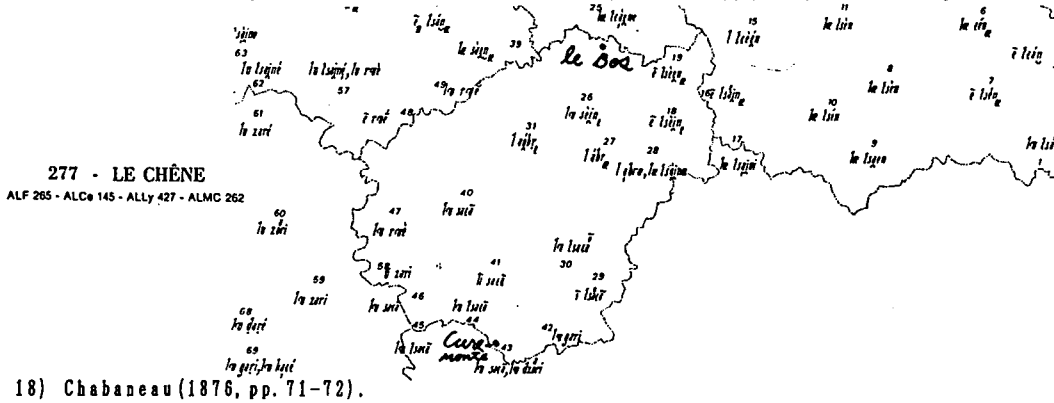
14) le Bos 集落では、語末の側音 -l が haut-limousin 方言としての影響下のもと母音化されるが、/ -el / の場合には [-ej] と発音される。

troupel(p. 218, I, l. 2) troupei tropeu ------ tropèl troupeau *throp(franc)

15) 註記 6) を参照。

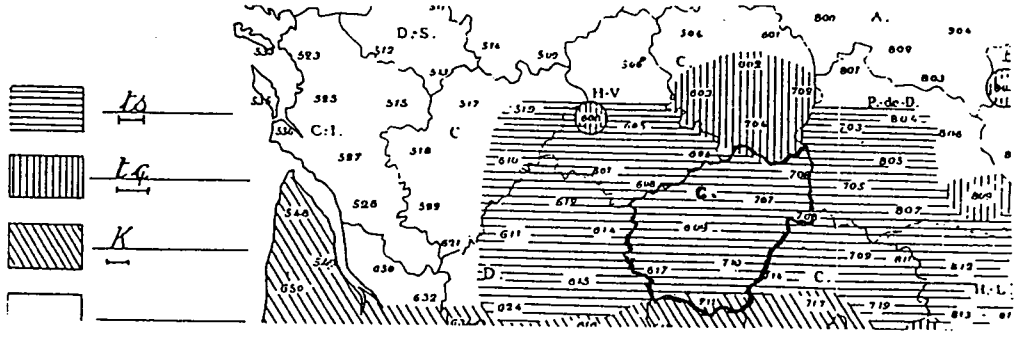
16) Alibert(1988, p. 17;Bec(1995, p. 36);Lescal(1923, p. 26). 個人により [ʒ~dʒ~tʃ~dz~ts] と発音される。ケルシー地方では、イタリア語の / c / かスペイン語の / ch / のように、 /tj~dj~tch~ts / の中間音のように発音される。

17) Alibert(1988, p, p. 424);Lescal(1923, p. 58);Stenta(1990, p. 226). イベリア語の起源かプレラテンの「石」を表わす garr~carr 起源だとされる語であるが、この chêne をあらわす語にフランス語のケルト語起源自体の chassan があり オック語圏(lang. cassanh[kasaɲ];lim. chassanh[tsa~tʃasaɲ])でも地域によりどの単語を使用するかが明確に分かれている。

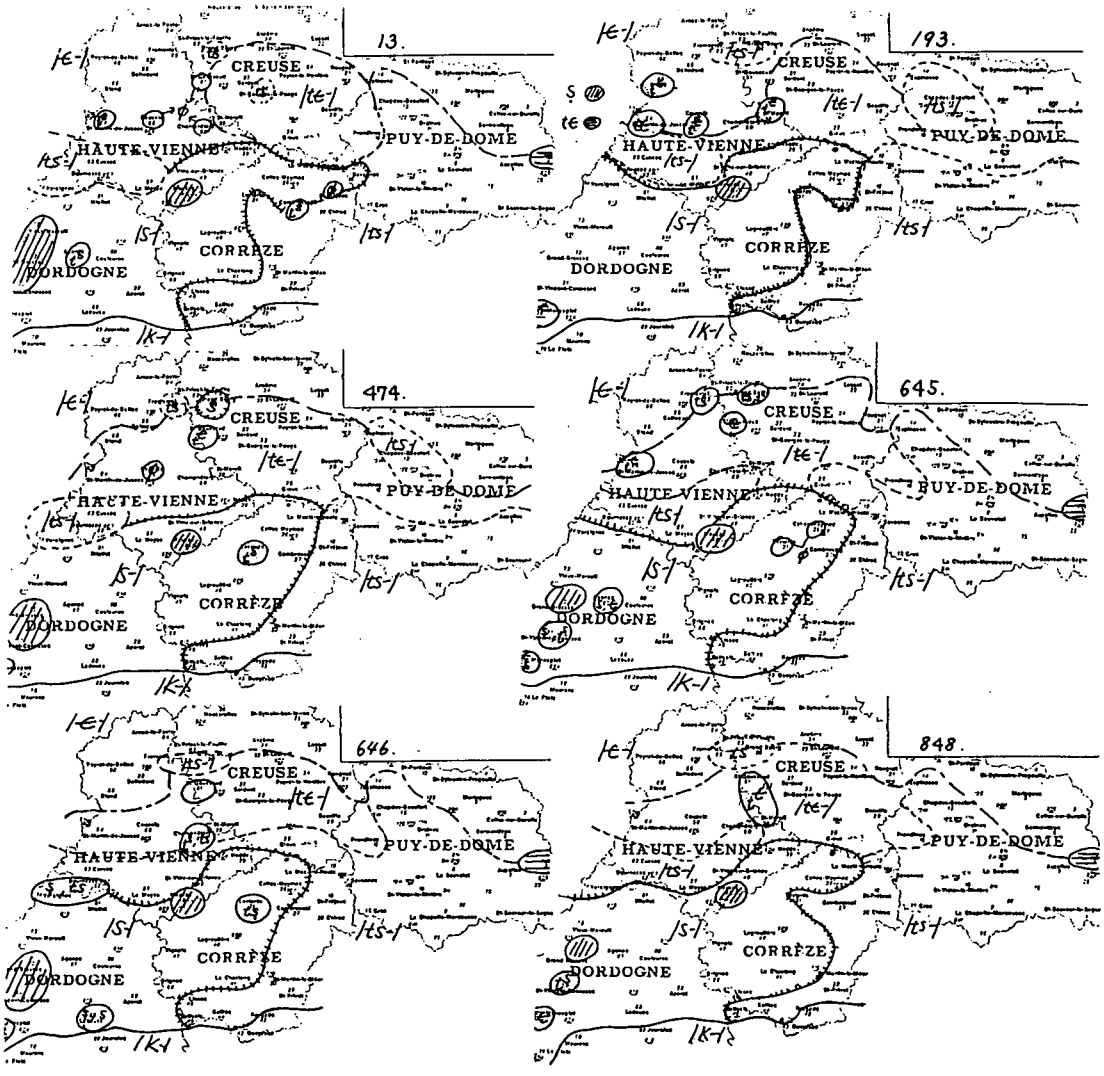


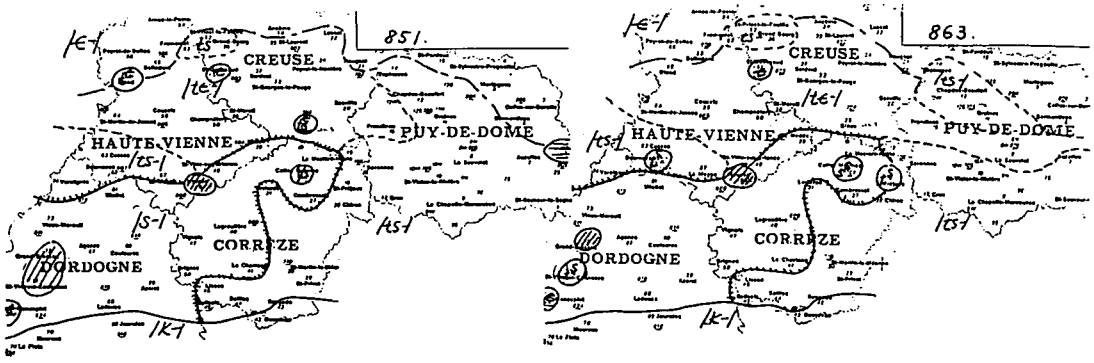
18) Chabaneau(1876, pp. 71-72).

19) Ringenson(1930, pp. 66-68).



資料





主要参考文献

Alibert(L.), *Dictionnaire occitan-français,* Toulouse, I.E.O., 1988.

Allières(J.), *La formation de la langue française,* P.U.F., 1996.

Bec(P.), *La langue occitane,* Paris, P.U.F., 1995.

Bourciez, (E.), *Précis historique de phonétique française,* Klincksieck, 1958.

Bruneau, (Ch.), *Petite histoire de la langue française,* t.1, Armand Colin, 1966.

Brunot, (F.), *Histoire de la langue française,* t.1, Armand Colin, 1966.

Camproux, (Ch.), *Les langues romanes,* P.U.F., 1979.

Chabaneau, (C.), *Grammaire limousine,* Maisonneuve et Cie, Éditeurs, Paris. 1876.

Dauzat, (A.), *Études de linguistique française,* 2e éd., Artrey, 1946.

Decomps, (D.), *L'occitan redde e ben lo lemosin,* Paris, Omnivox international, 1979.

Dhéralde, (L.), *Dictionnaire de la langue limousine,* Limoge, Société d'éthnographie du Limousin, de la Marche et des région voisines, 1968.

Fouché, (P.), *Phonétique historique du français,* 3 vols., Klincksieck, 1952, 66 et 69.

Giscard, (M.-Th.), *Curemonte,* Alençon, Les Ateliers de Normandie, 1990.

Gonfroy, (G.), *Dictionnaire normatif limousin-français,* Tulle, Lemouzi, 1976.

Krispin, (A.) et Poulet, (P.), *Los parlars carcinòls L'occitan parlé en Quercy,* Cercle occitan de Figeac, 1991.

La Chaussée (F.de), *Initiation à la phonetique historique de l'ancien français,* 2nd ed., Klincksieck, 1989.

Lalé, (J.), *Curemonte,* Treignac, Les Monédières, 1987.

Lavalade, (Y.), *Dictionnaire Français/Occitan Limousin Marche Périgord,* Limoge,

PULIM, 1997.

——————, *Le limousin dialecte occitan,* Limoge, La Clau Lemosina, 1991.

Lescal, (P.-G.), *Recherches et observations sur le patois du Quercy,* Marseille, Lafitte, 1923.

Meyer-Lübke, (W.), *Romanisches etymologisches Wörterbuch,* 5°éd., Heidelberg, Carl Winter Universitätsverlag, 1972.

Potte, (J-C.), *Atlas linguistique et ethnographique de l'Auvergne et du Limousin,* 3 vols, C.N.R.S., 1975, 1987, 1992.

Ravier, (X.), 《 347. Okzitanisch : Areallinguistik 》 in *Lexikon der Romanistischen Linguistik,* vol. 2, L'occitan, Le catalan, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, 1991, pp. 80-105.

Ringenson, (K.), 《 Étude sur la palatalisation de K dans les parlers provençaux 》 in *Revue de linguistique romane,* tome VI, Paris, Librairie ancienne honoré champion, 1930, pp. 31-90.

Robert, (M.), *Les mots du Limousin Dictionnaire français-limousin Parlers, limousinismes et traditions,* Limoge, S.E.L.M., 1997.

Ronjat, (J.), *Grammaire istorique des parlers provençaux modernes,* 4 vols., Monpellier, Société des langues romanes, 1930, 32, 37 et 41.

Roux, (J.), *Éléments de géographie linguistique du Périgord,* Bulletin de la seccion peiregordan de l'I.E.O., Paraulas, 1993.

Tintou, (M.), *Grammaire limousine,* Tulle, Lemouzi, 1973.

Stenta, (M.), et alii, *Corrèze,* Paris, Bonneton, 1990.

Wartburg, (W. von), *Évolution et structure de la langue française,* Klincksieck, 1969.

————————, *La fragmentation linguistique de la Romania,* Klincksieck, 1967.

Zink, (G.), *L'ancien français,* P.U.F., 1993.